



田中孝信 (監修, 解説),
『スラム街小説——19 世紀後半—20 世紀初頭の
ロンドンの闇の奥, イースト・エンドの人々と生活』

Takanobu TANAKA,
*Slum Fiction: Representations of Life in
London's East End, 1880-1920*

(5,250 頁, アティーナ・プレス, Part1 2011 年 10 月,
Part2 2012 年 12 月, 全 14 巻, 本体価格 252,200 円)

ISBN: 97848634011006, 97848634011013

(評) 武井暁子
Akiko TAKEI

「スラム」という言葉/単語を聞くと、スラムの外に生活する多くの人間は貧困、薄暗くむさくるしい裏通り、散乱したゴミ、あばら家、犯罪、放埒さ、ストリート・チルドレンを連想し、所詮縁遠い場所であると片づけがちだ。2008 年に公開され、作品賞、監督賞などアカデミー賞 8 部門を受賞した *Slumdog Millionaire* (邦題『スラムドッグ\$ミリオネア』) は本誌の読者諸氏にとって未知な場所であるムンバイのスラムとそこに暮らす人間の生がテーマである。ストーリー自体はシンプルで、スラム街に生まれ育った貧しく教養もない少年がクイズ番組で優勝し、多額の賞金を勝ち取り初恋の相手と結ばれるというものだ。パロディと成功譚を含み、いかにもハリウッド受けしそうな作品で、ご都合主義で、インドの貧困を踏み台にしているとの批判もある。『ミリオネア』はロマンスと並行してスラムの劣悪な環境、宗教的迫害、階級間格差、搾取、犯罪、暴力、墮落、生存競争も描いているが、例えば、ストリート・チルドレンの目潰しと物乞いビジネスの演出は現実のそれと比べるとはるかに生温いとさえ見える。

スラムについて書く人間がスラムの外に住み、衣食住足りた生活を送っているがゆえの制約や限界はヴィクトリア朝まで遡ることができる。都市化が世界でいち早く進行し、都市が過密状態になったイギリスでは、スラムの形成も早い時期に始まる。H. J. Dyos はヴィクトリア朝イギリスでスラム形成が進んだ理由は、資本が賃金に反映されず利潤が限られた階級のみを潤したことと、労働者の数が多く、賃金が安く抑えられ、御しやすい限り、労働者住宅への資本投下が不要

だったからだと論じる (27). 言い換えるなら、富が不公平に分配され貧富の差が生じたからこそ、スラムが形成され、スラムに関する記述もなされる。時代はだいぶ後になるが、この点について、Chesterton の「我々は、貧者を『引き上げる (raise)』努力に証明されるように、宗教において非民主的である。我々は貧者をよく治めるという無垢な努力に証明されるように、政府において非民主的である。しかし、毎月出版社から怒涛のように発行される貧者についての小説と貧者に関するまじめな研究書で証明されるように、何と言っても我々は文学において非民主的である」(276) との言葉は正鵠を得ている。

中産階級がスラムを知りたいとの熱意を持ち始めるのは、1840年代からであり、ダイアスはその本音は中産階級が貧困層によってもたらされるであろう危険を避けたいからだと言う (11)。1840-80年代に出版されたスラムに関するルポルタージュは中産階級にスラムの不快な事実を提供することを目的としたが、結局のところ、ロンドンの不思議を読者の興味を引くようにレポートする大衆ジャーナリズムか、スラムと接触を持つことによる墮落や革命が現実になる危険性を警告し、中産階級のいわれなき恐怖心や偏見を煽るだけのものでしかなかった。スラムの住環境の劣悪さは、例えば、Chadwickら公衆衛生運動で中心的な役割を果たした活動家にとっては最大の関心事の一つだったが、この手のルポルタージュではスラムの居住環境に関する記述は非常に少なかった。だが、スラムに関する著作物はスラムの存在を広く知らしめ、あまつさえエンターテインメントの一つにし、社会政策や慈善の領域を拡大する役割は果たした。

本選集に収録された作品は、スラム小説がフィクションのジャンルとして確立し、ビジネスとして定着した後に出版されたものだ。Andrzej Diniejko は「ヴィクトリア朝末期のスラム小説家は商業的成功に関心があった。多くのスラム小説は新中産階級のいかがわしい楽しみに合うように、意識して通俗的かつセンセーショナルに書かれている」と言う (“Introduction”)。チェスタトンにはスラム小説について、「[スラム小説]を書き、読む人間は中産階級か上流階級の人間である。少なくとも、大まかに言えばインテリ階級である。ゆえに、スラム小説が洗練された人間の目に映ったものだという事実はスラム小説が洗練されていない人間が送っている通りの生活ではないということを証明する (略)。スラム小説家は細部のいくつかが読者にとって未知であることにより効果を完璧に得ることができる。しかし、実態の本質から考えると、細部それ自体は未知のものではない。作家が調査していると公言している人間にとって未知であるはずもない」(280) と批判する。これらの指摘からわかるように、スラム小説家/読者と作品の題材となるスラム住民の間に埋めることが不可能な乖離があることを念頭に置きつつ、本選集収録作品の中で、スラム小説の代表作とされる2点を解説する。

Vol. 1 収録の Walter Besant, *All Sorts and Conditions of Men* (『あらゆる種類と階級の人々』, 1882, 以下『人々』と略記, 1921年サイレント映画化された) は, 監修者が「労働者階級のロマンス」(10)と定義するように, 階級を超えた結婚とヒーローの素性探しが重要なテーマである。主人公の Angela は美貌で裕福で教養があり, 気性がしっかりしており, 暇を持て余し, 思い込みが激しいという点で Austen の Emma Woodhouse を彷彿とさせる。不器量で財産がなくガリ勉の友が引き立て役兼相談相手なのは Elizabeth Bennet と Charlotte Lucas の関係と似ている。アンジェラと結婚する Harry は「3か国語を話すことが出来, ヨーロッパとアメリカにグランドツアーをし, 乗馬, 狩り, フェンシング, ダンスが上手だ。絵とヴァイオリンが少し出来, ダンスをたくさんし, 演技がうまく, 弁舌さわやかである。紳士にふさわしい求愛が出来るし, うまい詩が書ける。風采が良く高貴さがある。気取り屋ではないし, 似非審美主義でもない。常識がある」(13)と, 18世紀的なヒーローの条件をすべて備えている。しかし, アンジェラの社会的地位と財産がハリーより上で, ハリーは上流階級で育てられたが実は氏素性が知れない, アンジェラの祖父は工場主であったが, 切り裂きジャック事件でも知られるホワイトチャペルに長いこと住んでおり, アンジェラの上流階級の淑女らしい立ち居振る舞いがどこか鼻につくなど, 18世紀以降のイギリス小説の普遍的なテーマと人物設定を一ひねりしている。

監修者も指摘するように, 『人々』には副題の *A Impossible Story* (『ありえない物語』) が端的に示す現実味の乏しさが最後までつきまとう。アンジェラとハリーが恵まれた生活を捨てて, イースト・エンドの「人々 (people)」と暮らそうと決意するくだりが唐突であり, 説得力に欠ける, アンジェラとハリーを含め登場人物が類型化されている, スラムの描写が平板だということもあるだろう。だが, 『人々』の本質は, アンジェラとハリーが事あるごとに「人々 (people)」への理解と共存を口にするのは階級意識の裏返しで, 自らの出自を恥じるのと表裏一体をなしているという点ではないか。二人が「歓喜の館 (the Palace of Delight)」建設を熱心に進めるのは, 実は「人々」のためではなく, 汚点となるような自己の歴史を抹殺するためではないかと思える。『人々』に散見される階級意識は, 自らの出自を自嘲するハリーを「今時他人の氏素性を気にする人間などいるものか。この大都市はどこへでも行き, どこの馬の骨とも知れぬ人間の息子でいっばいではないか」(11)とたしなめる Lord Jocelyn がアンジェラの素性を知り, 「このような幸運の訪れを思いつくとは! イングランドで一番裕福な相続人 (the richest heiress in England) と恋に落ち, 成就するとは」(266)と大喜びし, 浅薄さを露呈する箇所にも表れていよう。タイトルの「あらゆる種類と階級の人々 (all sorts and conditions of men)」が「同じ」であり, 「最も裕福な人と平等である」

(330) はずの「歓喜の館」建設は「イングランドで一番裕福な相続人」であるアンジェラの莫大な財産無には不可能だ。結末でのスラムの住人が集うアンジェラとハーリーの結婚式は「あらゆる種類と階級の人々」の平等は「ありえない」という現実が浮かび上がらせる。

『人々』の14年後に出版された Vol. 8 収録の Arthur Morrison, *A Child of the Jago* (『ジェイゴーの子供』, 1896, 以下『ジェイゴー』と略記) はモリソンの代表作であると同時に同年のベストセラーでもあった。この作品が大変人気があったことは、いまだにスラムを題材にした小説が出版されると引き合いに出されることでも明らかだ。2009年に Joseph Corré (Vivienne Westwoodの子息) と Simon “Barnzley” Armitage が立ち上げたブランド A Child of The Jago はこの作品から名前を拝借した。2011年発売のイギリスのインディーズ系バンド Kaiser Chiefs の4枚目のアルバムの中には“Child of the Jago”という歌が収録されている (iTunesで購入可)。

ディニコはモリソンとベザントを比較し、モリソンはスラムに対し父親的温情主義的な感情を持たず、前述のアンジェラたちのような上流階級の篤志家によって再生する望みがない場所としてスラムを描くと指摘する (Diniejo, “Realism”). 確かに、1880年代のロンドンで最も悪名高かったスラム、オールド・ニコルを舞台にした『ジェイゴー』には冒頭から閉塞感と、Hardy 作品の “the immanent will” にも似た個人の努力や意思を一切無にする圧倒的な力に満ち満ちている。本文の前に置かれる狭いジェイゴーの地図は、主人公 Dicky の行動半径が誠に狭く、自由がごく限られていることを暗示する。1章で早くも明らかになるジェイゴーの「主要産業 (the major industry) (5) とは “cosh-carrying,” すなわち男女が共謀し、棍棒でカモを昏倒させ、金品を奪うことだ。「ジェイゴーの掟を破り、別のものになろうと骨を折るディッキー・ペロットとは誰なのか。敗北と苦しさ以外の何になるのだろうか。ベヴァリッジ老人が言ったように、ジェイゴーがディッキーを捉えているのだ。なぜディッキーはどうしようもないものと戦い、痛い目に進んで会う必要があるのか。ジェイゴーの外の道はベヴァリッジ老人が話してくれた。監獄、絞首刑、高等ギャング団だ。これがディッキーのチャンス、野心、目標だ。つまり高等ギャング団だ」(206) と語られる通り、ジェイゴーにとどまっても、外に出ても、ディッキーには非合法の選択肢しか与えられない。

1892年7月に17歳で殺害されたオールド・ニコルの少年 Charles Clayton をモデルにしたといわれる主人公ディッキーを取り巻くものは盗み、暴力、そして不条理である。9歳のディッキーは「大人になったら上流の奴らの服を盗み、高等ギャング団の仲間になるんだ。あいつらすごい盗みをやるんだ」(13) と無邪気に宣言し、特に気負うこともなく初の盗みを行い、主教の時計をまんまと奪う。意

気揚々と家に帰ったディッキーは成果を誇らしげに父親に見せると、褒められるどころか、公衆の面前で上流の人間相手に盗みを働くのは分別がないという理由でたたか殴られる。母親はいくらかましな家を出で、ディッキーに中産階級的の道徳を教え込もうとするが、長年の貧乏暮らしのため無気力でディッキーの支えにはならない。ディッキーが初の盗みで得るものは、「誰の助けも借りず、手際よく立派にジェイゴアの誰もが自慢するような盗みをやってのけたのに」(33)、なぜ懲罰を受けるのかという不信感だ。加えて、父親から日常的に受ける打擲は年長者の暴力への絶対的服従をディッキーに植え付ける。『ジェイゴア』には Rev. Sturt, Mr Grinder のような善意の人物も登場するのだが、ディッキーを押さえつける父親や搾取する Aaron Weech のような人物の前ではなす術がない。だが、父親が殺人罪で死刑になり、自暴自棄になったあげく喧嘩に参加し命を落とす結末はメロドラマ的で、作品を支配してきたジェイゴアの闇と釣り合わない感がある。

『人々』と『ジェイゴア』の他に、本選集には 1880-1900 年代に東ヨーロッパからのユダヤ系難民が多くイングランドに移住してきたことを反映した Israel Zangwill, *Children of the Ghetto* (1892, vol. 4 収録)、スラム小説家では稀な女性作家 John Law (Margaret Harkness), *Captain Lobe: A Story of the Salvation Army* (1889, vol. 3 収録) など興味深い作品が多く収録されている。作品の出版年順に読む、一人の作家のものを集中的に読む等、読者諸氏の好みに合わせて楽しんで読んでほしい。

参考文献

Boyle, Danny, dir. *Slumdog Millionaire*. 2008.

Chesterton, Gilbert K. *Heretics*. 1905. New York: John Lane, 1909.

Diniejkko, Andrzej. “Arthur Morrison’s Slum Fiction: The Voice of New Realism.”

<http://www.victorianweb.org/genre/slumfiction/morrison.html>. 2011.

———. “Slum Fiction: An Introduction.”

<http://www.victorianweb.org/genre/slumfiction/intro.html>. 2011.

Dyos, H. J. “The Slums of Victorian London.” *Victorian Studies* 11(1967): 5-40.

田中孝信. 『スラム小説に見るイーストエンドへの眼差し』(*Slum Fiction: Representations of Life in London’s East End, 1880-1920* 別冊解説). アティーナ・プレス. 2012.